身事バレエ教室

威鷺羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
身事バレエ教室

【Ｎコード】
Ｎ６４５０Ｗ

【作者名】
威鷺羽

【あらすじ】
身事夢子はバレエの先生。夢子の話しと夢子の生徒たちのオムニバス。

第1話

私の名前は身事夢子（みごとゆめこ）。バレエ教室を主宰しています。バレエ教室っていっても今年の春にできたところでしかもとても小さいお教室です。先生はもちろん私1人。

名前は身事バレエ教室。K県の海沿いにあります。私Uターンしてきました。小さいときからバレエが大好きでレッスンには熱心だったです。実家から片道1時間もかけてバスでバレエレッスンに行っていました。バレエは楽しくて遠いお教室に通うのも苦にはならなかったです。

夢かなって都会のバレエ団に入団した時はそれはうれしかった。好きなようにさせてくれた両親に感謝！だけどバレエの世界は狭くかつ厳しい。プリマなんかなかなかなれない。小さな役1つ、もらえない。・・・とうとうスターになれなかった私。

両親があいついで亡くなり私も独身のままバレエ一筋でとうとう三十路。家業の船具商を継いだ兄から戻ってこい！との連絡を受けてバレエ団に役のない私も年取っていずらくなって退団。そして小さい我がお城イコール身事バレエ教室を開設したわけ。

バレエ教室という同じ商売敵は田舎すぎてどこもない。そのかわり需要があまりないということで生徒数は今のところ14人ぐらいしかいない。だけど少ないけれどかわいい私の生徒達。いずれ彼女達からプリマが生まれるかもしれない。自分の叶えられなかった夢を彼女達の誰かがかなえてくれたら。

いや、かなえてくれなくともいい。バレエを好きになってバレエを楽しんでくれたらそれでいい。だから私はいずれプロになっても困らないよう、基礎は厳しめにかつ踊りは踊りやすい曲目を選んで楽しく踊れるように配慮している。

おかげで好評で口コミで増えてきつつある。大人からの要望もあり、大人向けバレエストレッチ教室も作ろうかな、と考えている。いわば充実した毎日をすごしているの。

さて、後裏守弘（ごうらもりひろ）氏が私のこの身事バレエ教室に見学に訪れて来たのは本当に突然であった。

第2話

ちょうど未就学児童のレッスンタイムで、いきなりぬっと入ってきた大柄な後裏(ごうら)氏にびっくりして生徒達は踊るのをやめて棒立ちになった。リズミカルなバレエ音楽が流れる中、子供達はじっとドアに立つ後裏氏を見つめる。後裏氏は苦笑していたがまたこの状況をおもしろがっているように見えた。

後裏守弘(ごうらもりひろ)氏。

かれは背広をりゅうと着こなし、きちんとした身なりだった。多分仕事の途中に思いついてこちらに寄ったのだろう。この港町にすんでいるものなら後裏氏の家をだれでも知っている。港町を見下ろす山のてっぺんに別荘がある。それが後裏氏の持ち物だ。彼は東京の金持ちらしい。しかも東京と別荘を行き来するのに大きな外車を使うので嫌でも目立つ。なんでもこの不況の中円高を逆手に取った貿易関係で大儲けした成金だといううわさだ。

そういう人が私の身事バレエ教室に入ってきたのである。初対面だが私だってああこの人がうわさの後裏氏だなってわかった。小さい生徒達すらもあの山のてっぺんにすむ金持ちだとわかったのだから。

私のバレエ教室は狭くて小さい。玄関を開けるとすぐレッスン場だ。階下が兄が継いだ船具商店だからいわば間借りしているのだ。

私は生徒達も少し待っているように言いつけ、後裏氏の方に近寄った。まだ見たことはないが彼には若い奥さんと小さな娘さんがいると聞いている。もしかしたら娘にバレエをやらせようとしてきたのかもしれない。そうだったらいいのに、と一瞬さもしい考えがうかんだ。金持ちの資産家の娘を生徒にするということはその分発表

会などにお金がかけられる。後援もしてくれるかもしれないからだ。
いやそうじゃないかもしれない、そんな考えを振り払って私は後藤氏に声をかける。

後裏氏は私に会釈をしてまっすぐ見つめた。年頃は５０歳かいや、もう少し若いかな。白髪がいやに目立つので老けてみえるのだ。
「ここは身事バレエ教室ですね。あなたは、ここの先生ですか」
「そうです。身事夢子です。あのう、ご見学ですか」
後裏氏は私の読み通り、自分に7歳の娘がいてバレエを習わせようとしてこちらに見学にきました、と告げた。
後裏氏自身はバレエを知らなくてどんなものかまず自分で見に来たようだ。そもそもバレエをするのにまず見学、ということになるが母親ではなくて父親が来ると言うのはめずらしい。
私は快く見学を許し、小さな椅子を持ってきて入り口近くのレッスン場のすみっこですわって見学するように言った。

開校してまだわずか2カ月。この未就学児のクラスはわずか5人ほど。みんなバレエを一生懸命覚えようとしているところだ。拙いながらも音楽にあわせて身体を動かす。小さいレオタードにフリルのついたスカートを手でつまんでスキップする。
「はあい、じゃもう1回さっきのやりましょうね。背筋をぴんとのばして、おひざはまっすぐ。はい、進んでーーー」
2人ずつ順番にレッスン場のはしからはしまで踊らせる。といってもまだ超初心者なのでスキップだ。
最後にエンドレスで輪にさせてすすませる。まだ足がもたつく子には手をつないで一緒にすすむ。
「はい、みなさん、いいですよー。今度は先生の動きを見てね」
私は右足を軸にして、左足をコンパスのようにまわしてバレエ式のおじぎを教えた。これは第1回目のレッスンの終わりに必ずさせている動きなので、まあできるようになっている。

小さな子供たちが5人、横に一列におしりを突き出してあひるのように並んでいると、バレエを知らない人間でも思わず「かわいい」と微笑んでしまう。

後裏氏も例外でなくにこにこしていた。小さな生徒達は後裏氏が気になるらしくちらちらと後ろを見たり大きな鏡に映っている後裏氏をじっと見つめたり。落ち着かないでいる。

後裏氏の娘さんがこのお教室を気に入ってくださったらいいのに・・私は窓から入ってくる潮風を吸い込む。

ここは港町なので潮風の匂いがこのお教室もしてくるが気にならない。そこでバレエを教える。Uターンすると決めたときは都落ちという気分もないではなかったが、故郷に帰ってきてよかったと思っている。いけない、また話しがそれてしまった。

第3話

レッスンが終わり生徒の姿が消えるまで、後裏氏は動かなかった。最後の1人がさようならのあいさつをして消えるまで彼は口を開かない。彼は娘にバレエを習わすためにここに来たのではないか？

とうとう私と後裏氏の2人だけになり、私がレッスン時間と受講料金を書いた小さなチラシを持ってくると後裏氏は娘はここのレッスン場まで通わせるつもりはないという。私に別荘のところまで来て教えてやってくれと言う。

なにかわけがあるな、と思った。別荘とは聞いているのに、いつのまにか娘がずっと住んでいるのだ。後裏氏は説明した。

彼の娘の名前は杏里（アンリ）。7歳だという。幼少時から身体が弱く外に出せないので、先生の方から教えにきてくれないかという依頼だった。いわば出張レッスンをしてくれということだ。

杏里にバレエを教えにきてくれるなら、別荘の地下室をバレエ専用に変えるという。現在は後裏氏専用のジムとゴルフ練習場にしているが娘のために明け渡すと言う。ジャンプしても大丈夫な高い天井、足を痛めないようにバレエ専用のリノリウム床を張り、壁一面、鏡張りにする。壁沿いにバーをつける。音響効果も全部1級建築士に依頼するつもりだと言い切った。

こりゃうわさ通りの成金の金持ちだわ・・。そういやこの窓から見える別荘だってしゃれた造りだ。これも有名な建築士のデザインなんだろうな。

もちろん私は2つ返事でOKした。出張レッスンは苦にはならない。まだまだ生徒数は少ないし時間はいくらでも開けられるからだ。

・・・いい生徒さんが入ってきたものだわ、私にも運が向いてきたかも。

杏里という娘さんにもしバレエの才能があれば、コンクールにもばんばんだせる。コンクールにはお金がかかる。だが後裏氏なら大丈夫。留学だってなんだってさせることができるだろう。私はうれしくなった。

でもなぜこのバレエ教室ではいけないのか、我に返ってまずはその理由を聞きたいと思った。先生を独占して1人レッスンもいいかもしれないが、発表会の時はどうするのか。最初からソロで（1人で）踊らせるわけにはいかない。また仲間意識も必要だし、やはりここはグループレッスンから参加してほしいところだ。

「あの、どうしてグループレッスンがお嫌なのですか？差し支えなければ教えてください」

「そうですね、いずれわかることですから」

杏里が外に出せない理由は驚くべきことだった。何のことはない彼女にはアトピーと喘息があり、それがとても重いのだそうだ。東京の空気も悪いのでこの港町に別荘を建て、彼女にはこの春からそこに住まわせているのだと。

アトピーの子って私の教室にも何人かいる。重症のってどんなのだろう。だから本当は小学校の1年生になるはずだが行かせてないという。勉強は後裏氏の妻が教えているらしい。そのまま当面はそうするつもりだと。だけど家に閉じ困りきりだとどうしても運動不足になる。空調に気を使い娘専用のバレエ教室をしてもらえば喘息も良くなるだろうと言うのだ。

「そういうご事情ですか。じゃあ、学校も・・・」

「理由を言って登校を見送っています。実は1昨年あの子の母を亡くしまして、それからちょっと心身が不安定なのです。私には去年結婚したばかりの後妻がいまして、継母にはなりますが彼女をよく見守ってくれています」

「バレエをやらせるというのは奥様のお考えですか」

「いや、杏里自身が頼んだのです。なんでもテレビでバレエを見て自分もやってみたいと言い出したのです。あの子が私に頼みごとをするのは初めてですがね。

妻は杏里を外に出すのを反対していますが杏里はどうしてもやるといってききません。それで折衷案として出張レッスンを依頼しにきたのです」

内心、過保護すぎるとは思ったものの、当然私には異論はない。即断で了承した。

後裏氏も喜んで月謝にガソリン代とあわせて出張代金と称して破格のレッスン代金をその場で支払った。

そういうことで・・、週2回ずつ私は山の上の後藤氏の別荘に出かけることになったのである。

第４話

というわけで前置きの話しがすごく長くなったが、あの海の上の丘の別荘に私は週２回、後裏杏里（ごうらあんり）のために個人レッスンを開始したのである。

後裏杏里。どんな女の子か、私は楽しみだった。母親に連れられて、バレエを始めた生徒と自分からバレエをやりたいとだだをこねて母親を連れてきた生徒とはバレエを習う意気込みがあきらかに違うからだ。この場合は父親１人見学させただけだけど。

初対面から私達は気があうとわかった。

杏里のアトピー？は確かにひどかった。多分学校へ通学させたらいじめられるというのはあながちうそでもなかろう。人間の女の子の顔ではなかったからだ。

目と鼻は確かにある。口もだ。しかしその境界線と言うのが吹き出物でぼやけていてわからないのだ。眉毛もぬけおちてなかった。髪の毛すら半分なかった。

しょっちゅう無意識にかきむしるらしく、そのたびにぼろぼろ表面の皮膚がおち、新しく血がにじんで洋服を血濡れにし、床を汚してしまうのだ。

顔、頭、そして手足、身体。ほぼすべてに吹き出物ができていた。

彼女はかゆみと痛みに耐えながらもはきはきと私にあいさつした。私はその様子にとても好感をもった。反対に杏里の義母になった女性は正直感じが悪く、好きになれないな、と直感した。

この女性は私とはあまり年が変わらないように見えた。正直後裏氏はこういう険のある女性が好みなのかと意外に思ったぐらいだ。名前は後裏消絵（ゴウラキエ）。

どうみても夫婦の年の差が２０歳はある。温厚な後裏氏にどうといったのか不思議だった。美人は美人なんだけど・・？

義母といえども杏里をかわいがりよく世話をしているのかもしれ

ないが、バレエをやらせるのに彼女はあきらかに反対していたのだ。私には一応冷ややかであってもあいさつはしたが、こういう症状が出ているのでバレエはやらせたくなかったのです、とはっきりいった。後裏氏はその時の場面にも同席されていたのだが、後妻には何もいわなかった。

その女性は「あなたは杏里を甘やかししすぎます、地下のレッスン場だってどうせ長くはもたないしお金の無駄だわ」と初対面のバレエの先生の目の前ではっきりと言ってのけたのだ。

後裏氏は黙り込み、杏里はうつむいた。それから顔の皮膚をいきなりばりばりと掻きむしったのだ。血が私の方まで飛び散り白くかわいた皮膚がぱらぱらと落ちた。

消絵ママはそれを見ると「汚いわね、杏里。やめなさいってば」と怒鳴った。その様子を見て杏里をかわいがってよく世話をするって本当かしらという疑問がわいた。後裏氏は仕事が忙しすぎて家族と過ごす時間はそんなに多くないのかもしれない。だから普段の様子がわからないのかもしれない。

だけどその消絵ママが憤然と部屋を出ていくなり杏里は私ににっこりして見せた。顔が吹き出物でふさがれていても血だらけでも目の輝きまでは消せない。

後裏氏がポケットから大きめの医療用ガーゼを取り出しそのビニールをやぶって血を拭ってやった。後裏氏は穏やかな顔で娘からでた汁を丁寧に拭いてやっている。

バレエを学ぶ喜びに彼女の顔は光り輝いていた。私は杏里が大好きになった。きっと杏里の方も私のことが好きになってくれたのに違いない。

私は杏里と後裏氏に「アトピーはレッスンには関係ないのでこれからさっそくレッスンを始めましょう」と言った。杏里は飛び上がって喜んだ。

すぐに地下のレッスン場に案内されたが急ごしらえの部屋にして

は上出来だった。バレエ用の足を痛めない床に総鏡張りの壁面、音響効果まで。広さも私のレッスン場の2倍はある。申し分なかった。
短い期間の間にこんな田舎でこれだけの工事をしてのけた後裏氏の経済力に私は敬意をしめした。娘にバレエを習わすためには、経済力の多少はどうれあれ、バレエに理解がないと自分がかせいだお金を娘のおけいこ事にまわせないからだ。私はバレエで生きているバレエの先生だから、娘たちを習わせるすべての親御さんには敬意を示す。

レオタード姿になった杏里はとてもかわいかった。後裏氏が東京まで出ていってわざわざ買い求めたらし。ピンクのタイツにピンクのバレエシューズ、ピンクのレオタード。ピンクづくしだった。
「ピンクが好きなのね？」と聞くと杏里はにっこりした。
「よく似合うわ！」とほめると杏里はまた跳ねあがって喜んだ。
タイツ越しににじみ出てくる体液やレオタードから見える皮膚のでこぼこ、腕の様子も痛々しい有様だったが踊るという喜びに彼女は輝いていた。
私は杏里にバレエの最初の最初。基本から丁寧に教えた。
バレエの姿勢、立ち方と足の1番から5番。おまけの6番と。
それとプリエとバレエ式のあいさつのやり方を教えて最初のレッスンは終わった。
杏里は熱心によくついてきてくれた。熱心さのあまり身体のかゆみも忘れて掻きむしったりはすることはなかった。この情熱がずっと続くならばこの子は伸びるだろうと思った。また体つきもよい。スレンダーで手足が長い。年の割には背が高い。後裏氏も背が高いのでこの子も伸びるだろう。私は週2回、ここで教えることになったがとても楽しみになった。
後裏氏は最初のレッスンだけ付ききりで見学していたが始終にこにこしていた。杏里もにこにこしながらバレエを習っている。
義母の女性はとうとう姿を現わさなかった。それでも平気だった。

杏里はバレエを習い父の許可を得、私とレッスンをはじめたのだから。

第5話

杏里へのレッスン、はじめて2週間。まだわずか4回目。だけど杏里のバレエレッスンに対する情熱はまったく衰えを見せない。新しいポーズやバレエの言葉を教えるたびに目を輝かせて覚えようとする。身体も毎晩私の言った通りにお風呂上りに柔軟体操（ストレッチ）もかかせていないらしく、やわらかくなってきたと自分で言う。

もちろんまだまだ初心者だがこの熱心さはバレエを続けるのには欠かせないモノだ。週2回ではなく、毎日すればもっと伸びるだろう。それにはまずアトピーをなおして私の教室で他の生徒と一緒にレッスンを受けてもらいたいものだ。

やはり初心者は個人レッスンよりもグループレッスンから初めてもらいたいと思うからだ。

だが杏里には全くの初心者にしては、リズム感があった。覚えるのも早い。だから私もついつい時間を忘れて熱心に教え込んでしまう。それぐらい杏里の熱心さに引きずられてしまったのだ。

今日のレッスンも20分ほど時間オーバーだった。これで今日のレッスンは終わりにしましょう、というと杏里は息をはずませて「身事先生、私はバレエが大好きです！」と叫んだ。私はもちろんその言葉をうれしく思った。こうして私達はバレエを通じて仲良くなったのだ。

週2回といえどもレッスンのためにこの別荘に通ってくると聞くともなしに様子がわかってくる。

後裏氏の後妻かつ杏里にとって継母にあたる消絵（きえ）ママはまず見かけない。家には杏里だけだった。メイドはいたようだが杏里自身が消絵ママがあのメイドはだめと次々にやめさせたようだ。

食事の世話は結局消絵ママがアトピーよけの手をこんだ献立だけは作るらしい。

家の人間関係には私は関係ないのでかかわりたくはないが、はっきりいって消絵ママは杏里をかわいがっていない。孤独な杏里がかわいそうだった。

彼女には小学校へ行かせず（いじめにあうと消絵ママが反対したそうだ）友達もできず唯一バレエだけが楽しみなのだ。

消絵ママの杏里に対する無関心さが理解できなかった。食事などにはこだわりを見せると言うが本当だろうかと言うのが私の本音だ。

杏里は消絵ママがいつも私のアトピーを心配してくれるのでうれしいとも言う。だから彼女からバレエをすることに今でも反対されているのが悲しいとも言う。

一度彼女にもレッスンの様子を見てほしいのだが姿も見せないのでそれはできなかった。杏里をかわいいと思うならば、一度だけでも見てほしかった。彼女がどんなに喜んでバレエを踊るか、熱心に受講しているか、ぜひ見てほしかった。

「ママに渡しておいてね」と杏里に託して手紙も書いたが返事もなかった。

消絵ママも実は子供のころはアトピーがあったようでいまだにヨモギエキスの入った漢方の美容エキスを自分で作ってつけているそうだ。今は綺麗に治っているのでいずれ杏里自身も治ると思っているようだ。

だが見る限りよくはなっていない。ヨモギもよいとは聞くが消絵ママの手作り品というし、一度病院受診をしてみたらどうかと提案したが杏里は嫌だと言う。

杏里の本当の産みの母親は杏里の弟の出産時に麻酔のミスで母子とも死亡。病院の対応に納得できず現在もなお医療訴訟進行中ときけばそう強いこともいえなかった。

それにしてもアトピーってこんなにひどくなるものかしら・・？季節は夏の暑い盛りにさしかかったがあまりよくならない。レッス

ンが終わると、レオタードやタイツの色は必ず変わる。汗の色ではない、アトピーの浸出液によるものだ。

相当かゆいらしく時折踊ってないときに無意識に腕や顔をぼりぼり掻いて、また新しく今度は血を流したりする。だが出血してもなお、かいたりする。これって悪循環じゃないか。

聞けば去年の今頃まではまだましだったそうだ。

でもレッスンをすすめていくにつれて私は不思議なことに気付いた。彼女は腕は掻きむしってもレオタードとタイツの上は決して掻きむしったりはしないのだ。

第6話

レオタードの上はかゆくないのだろうか？
私は不思議に思って杏里に聞いてみる。
「あの、私も不思議なの。バレエをやっているうちにだんだんかゆくなくなっちゃった。こんなのはじめてです。アトピーも治るかもしれないですね、先生」
「まあ・・こういうことってあるのかしらね？」
「先生、私バレエをはじめて本当によかった！先生とのレッスンが終わったら私すぐにおさらいして、それからレオタードをタイツを自分で洗うの。自分の部屋で干しておいて、それから毎晩寝る前にもう一度レオタードとタイツをつけてストレッチをして寝るの。そうすれば身体もやわらかくなっていくし。
それからまた自分で洗うでしょ。自分の部屋で干しておいてそれを見て今度先生がこられるの、あさってだな、楽しみだなあってバレエシューズをだいて寝てるの。
早くトウシューズもはけるとうれしいなあ。でももっとがんばらなきゃだめね」
「杏里ちゃん、バレエがそんなに好きだったのね、先生もうれしいわ」
「えへへ」
実際杏里は覚えが早いと思っていたが自分の部屋でまじめにおさらいと称した復習をしていたのだろう。本当に短い期間で身体がやわらかくなってステップもバレエらしくなっている。だが、私はその杏里の言葉になにかひっかかるものがあった。
「だんだんなおってきてよかったわね。でもなんで身体と足だけなんだろうね？顔はそのままだね、なんでだろう」
「私もわかりません、消絵（きえ）ママからもらったお水も毎日ちゃんとつけているのに」

「お水ってなに？」
「消絵ママが作ってくれるの。ママもこのお水でだんだんアトピーがなおったって。ヨモギが入っていてとてもいいにおいなの」
「へえ・・・そお・・？」
「先生、見る？とてもきれいな瓶にはいっていてきれいな水色をしているの」
「うん、ちょっと見せてくれる」
杏里は自分の部屋に戻りすぐに瓶をもってきた。なるほどとても美しい凝ったデザインの瓶に入っている。だがサイズがとても大きい。杏里が両手でいっぱいだった。
「これで2週間分なの」
香りも確かによかった。ヨモギと何かの香料の匂いだ。手につけてみるとピリピリする。これがかゆみをひくのだろうか。ハンカチで拭きとるとつけた部分が薄赤くなっていたので、自分にはあわないと思った。
消絵ママがこの家にきたのは去年の秋ぐらいだという。1年近くこのお水を使っていてひどくなっていっているのではないだろうか。だが消絵ママは最初は一時悪くなっているようにみえるが、身体の内側からだんだん治っていくからこれでいいのだという。
私は何か心の中でざわめくものを感じた。ここ地下のレッスン場ではいつも私と杏里の2人だけだ。
「ねえ、食べる物とか洗濯とか消絵ママさんはあなたによくしてくれるのね？」
「ええ、いつか私のアトピーを治してあげるっていってくれる」
「身体と足のアトピーがましになっているけど、このことについて何か言われた？」
「ちゃんとお水はつけておきなさいって、洗濯もしてあげるから自分でしなくてもいいのよって。でも私バレエのことだけは自分でしておきたいって断ったの。ママは怒っちゃってしばらく口を聞いてくれないけどあきらめたのかな？」

私には科学的な知識もないけれど、この話を聞いて変に思った。やりすぎかと思ったがでもやっぱり変だ。さっきつけた皮膚の部分が変にぴりぴりする。

私は杏里に言った。消絵ママには内緒でしばらくこのお水を使わないように、と。そして自分の着るもの、特に下着類は自分で洗うように。

私の思い込みだと本当にいいのだけど、おせっかいかもしれないけれど、やはり変だ・・。

それからそのお水を少しもらって私はその足で市民病院に持っていった。お水の正体を知りたかったからだ。病院にそんなことうちはしていませんと断られたがなんとか必死に頼むと遠方の化学分析センターを紹介してもらえた。

私の考えていることがもしそうだったら大変なことになる。でも消絵ママが杏里のためを思ってそうしているのだとしたらそれはそれでいい、そう思った。分析センターでも一般市民には依頼を受けないとかいろいろいわれたが、やさしそうなおじさんをつかまえて必死で理由を言うと万一のことを心配しているんだね？と言ってくれた。

簡単なものでよかったら検査してあげるって言われほっとして私は長椅子にすわって待った。

結果はなんとアトピーをなおすどころか皮膚を腐食させる酸が入っていた。私は驚いた。おじさんも「こんなの子供につけさせるなんてどうかしてる。すぐにやめさせなさい」と怒った。

第7話

子供の皮膚を腐食させて酸が入っているだなんて！
「故意に入れたんだろうね？それも子供に？なんでまた？」
私はその場で警察に連絡を入れた。大げさだったかもしれないが一刻も杏里を助けたかったからだ。後裏氏に悪かったが、そんなことまで気がまわらなかった。
あんなに子供心にアトピーで悩んでいるのに親切ごかしにもっとひどくさせる液材を与えてどうするつもりだったのだろうか。

警察はすぐに来てくれた。事情聴取を私と検査してくれたおじさんにした後すぐに現場へ急行してくれたらしい。公的な機関で検査してくれた当のおじさんの口添えがあったせいだろうとおもう。
結果、消絵ママは逮捕された。
罪名は殺人未遂だ。

後裏氏と結婚までにはこぎつけたのはいいけれど、継子になった杏里までは愛情が持てなかったらしい。でも後裏氏との手前、かわいがっているようにみせかけたかったようだ。
例のお水は警察に押収され、さらに詳細な分析をされたようだ。
あれには酸の他にも有毒成分が入っていたのだ。
杏里はすぐに病院に入れられ身体をくまなく検査された。すでに肝臓に影響が出て肝機能が落ちていたらしい。皮膚上につけていたので反応が遅く出てそれくらいですんだのだ。不幸中の幸いだった。あと2週間もつけていたら体力が急激に落ちて普通の生活に戻るどころか死んでいただろうと医師が言ったそうだ。それを聞いた時にはぞっと鳥肌がたった。
杏里は気丈にふるまっていた。義母とはいえ、なついていたし必ずアトピーを治してあげると言われて信じていたのだ。だけど裏切

られた。それでも一言も消絵ママを責めたり恨み事は言わなかった。
後裏氏から後日そう伺った。
「先生には感謝していますよ。消絵がそういう女だったなんて残念でならないが、早くにわかってよかった。杏里が死んでしまったら本当に取り返しがつかないところだった。助かって本当によかった、よかった。本当にありがとうございました」
後裏氏も消絵ママのことは一言も非難めいたことはおっしゃらなかった。私は後裏氏に伝えるよりも早く警察に連絡したことを責められるかと思ったがそれもなかった。感謝の言葉だけだった。

私は後裏氏に一番心配していたことを聞いた。
「あの、杏里ちゃんはいつ退院できますか？」
後裏氏ははじめてにっこりして即座に言った。
「明日です。明日はちょうどレッスン曜日にあたりますな。杏里が先生に絶対に来てもらってと言ってます。来ていただけますか」
「もちろんですわ」
「杏里は病室でも柔軟体操をしていました。身体がなまると困るからって。あそこまでバレエ好きになると思いませんでした。健康になれるならなんだってさせてやるつもりです。先生、今後ともよろしくお願いします」

今回の事件は小さな港町での一大スキャンダルだった。地元の新聞記事にもなった。
怪我の功名ってこういうことをいうのか私のバレエ教室は知名度があがり一気に有名になった。そして入会の問い合わせがどっと増えた。生徒数が増えることはうれしいことだ。今年は無理でも来年あたりは発表会が開けるだろう。

杏里は大きくなったらバレリーナになるそうだ。アトピーは入院中に良い皮膚科医にあたったらしく薬が変わり少しずつではあるが良くなってきている。

もっと症状がよくなったら自分の家のレッスン場でもいいけれど、私のスタジオに来て同じ年頃の生徒たちと一緒にレッスンできるように誘ってみようかと思っている。

杏里の章・完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6450w/

身事バレエ教室

2011年10月7日03時12分発行